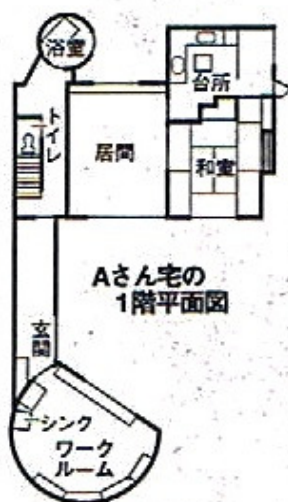


# 住まい



## 定年後の家

退職を機に住まいを新築したり増改築する家庭が多い。勤めていたころと違って夫婦で家にいる時間は増えるが、会社で長い時間を過ごしてきた男性にと

って「家庭での居場所がない」と思い悩む例は珍しくない。建築家の植木秀樹さんは、夫婦それぞれの居場所を考えた住まいの設計を勧めている。

### 夫婦それぞれの居場所を

#### 夫専用の離れ設計

#### 友人を気がねなく招待

今年四月に都内の会社を退職したAさん(55)は昨年暮れ、栃木県に住まいを新築した。それまでずっと東京都内で社宅住まい。退職と同時に社宅を出ることになるため、二年前から夫婦で住まいの設計を考えた。

新築する場所は、以前勤務で事業所に勤務していた時、市内に購入した土地があり、慣れ親しんだ街というところもあって、そこに決めた。ただ今度は、Aさんの生活の中心は会社ではなく自宅

ないこと、夫婦それぞれの友人を自宅に招いた時にもう一方が気がならないこと――などを互いに望んだ。

相談を受けた植木さんは、敷地内に母屋から独立したAさん専用の離れを作ることをご提案した。木造二階建て百十平方メートルの母屋と別に、木造平屋建て二十平方メートルのワークルームを作り、二つの建物に屋根を渡してつないだ。

ワークルームは、Aさんの好みもあってユニークな田舎形。作業デスクのほか、書棚

になる。さらに地域住民として、長く腰を落着けて住む場所でもある。

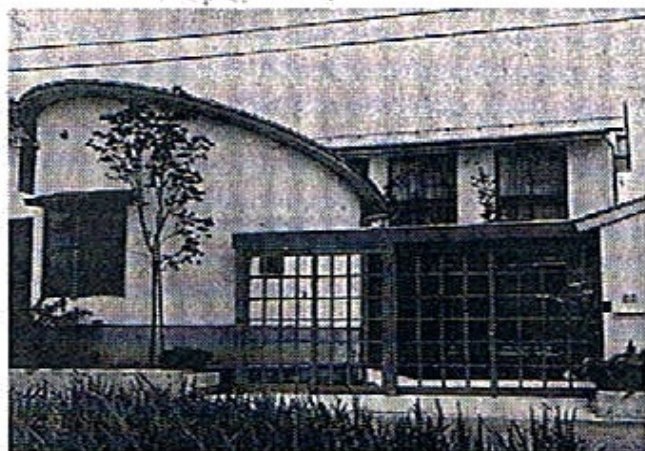
Aさん夫婦は、新しい住まいで、夫婦がいつも鼻を突き合わせるような関係にしたく

やロッカーがある。食事をしたり寝たりするのは母屋だが、昼間は母屋からワークルームに、出勤・するのだ。

ワークルームには冷蔵庫や流し(シンク)もあり、友人が数人訪ねて来ても、妻の手をわすらわせず、Aさん自身もてなすことができる。

また、トイレや洗面室、浴室は母屋にあるものの、母屋を通らないでも使えるようになっている。ワークルームにみんなで寝泊まりするようになることも可能だ。

夫婦の居場所を考えて設計したAさん宅。写真下で、田舎形の建物がAさんのワークルーム。後方は母屋



積極的な老後考え



昨年暮れ、新居に引っ越しして以来、「勉強会などで一度城」なら、母屋の居間は「女に五、六人の友人を招く機会が三回ほどありました」とAさん。夫婦それぞれの居場所を作

る時に、常に離れを作る敷地があるとは限らない。その場合、それぞれの住まいの固有の状況に依り、一階と二階で空間的に仕切ったり、同一平面で間取りを工夫したりするようになる。

植木さんは「夫婦の仲がいい思いこみで設計して欲しい」と話している。

定年後に住まいを新築、増改築する際に、夫婦互いの居場所を常に考えておきたいということ。より前向きで、積極的な老後が送れるよう、会社勤めのころから、定年後の住まいについて、夫婦で語り合っておくことが大切だ。

#### こどもの詩

#### 夜空の子馬

羽入 千夏

ある日 わたしたちに  
ふいてきた風が言った  
天に子馬がいて 遊んでいるよ  
ほのほら見て  
パカッパカッと光ったろ  
あれは子馬がはねたんだ

(石川県津幡町・太白台小四年)

天馬のこどもなのですね。今夜星空を見上げましょう。(川崎 洋)